材木商の歴史にみる江戸、明治、大正

大和屋創業184周年記念事業『大和屋の歴史展』

くまがや館

地域とともに歩んだ商家の姿を紹介

江戸時代に熊谷の地で分家店開きした初代から数えて七代目、黒田小源治氏が社長を務める「大和屋」は今年、創業百八十四周年を迎える。平成二十年の節目にあたり、同社は江戸から現代までの変遷を振り返る「大和屋の歴史展」を企画した。今月下旬から第一弾の展示が熊谷市内で始まる。材木商として分家店開きした創業者、初代大和屋・黒田小源治から代々の戸主に引き継がれてきた品々の中から、年代物の逸品を選び、一般公開するユニークな試みだ。展示品の見どころや熊谷の地に根を下ろし、時代とともに歩んだ大和屋のエピソードを紹介する。

創業期

忍藩の御用商人として

江戸時代の文政七（一八二四）年二月二十九日、屋号「大和屋」が熊谷に店開きした。当主は米・材木を扱う商人として兄、孫市から分家、独立した初代小源治だ。

時は将軍徳川家斉、家慶の時代、商人の経済活動が活発化し、庶民の暮らしが賑やかになる一方、治安の乱れも表面化していた。

松平家姫君から任命した雛飾りの道具

初代が残した「諸色日記帳」には、商業活動の記録とともに、社会的な大事件に関する情報収集の記録がある。

有名な「大塩平八郎の乱」や「天保の飢饉」、江戸の大火や打ちこわし、「嘉永五年、北アメリカより唐船…浦賀へ参り」という記述も見られる。

日記帳は当時の商取引だけでなく、熊谷の一商人の目から見た市中の様子を知る貴重な資料ともいえる。

初代は、忍藩の御用商人として地元に根付いた初代小源治は、戸主は代々小源治を名乗るという家憲や賭け事と保証人を禁ずる家訓、災害時や困窮民救済には先んじて利益を還元するよう説き、その精神は代々引き継がれた。

大和屋は江戸・明治・大正・昭和・平成と、侍の時代から明治維新を経て戦中、戦後と変化する社会情勢にも対応し、発展を続けてきた。現在、木材業のほか住宅部門や不動産管理など、事業も多岐にわたっている。

3期に分けて企画展示

地域の情報発信基地に

同社は四年前、創業百八十年を機に熊谷市筑波一丁目の同社が運営する駐車場一角に、地域のコミュニティスペース「くまがや館」を建設した。

自社のPR館ではなく、地域住民らの情報発信基地として開放、オープン以来、口コミで利用者や展示希望団体が増えて、今や展示室は順番待ち状態で、市内でも存在感を増している。

創業記念として同館二階展示室で行う「大和屋の歴史展」は、代々伝わる江戸時代や明治、大正、昭和の品々、材木屋の今昔や商家の暮らしを偲ばせる道具類や年代物の数々を順次展示し、一般公開する。

第一弾「雛（ひな）まつりにちなんで～江戸時代～」は今月二十二日から三月五日まで、第二弾「材木屋の昔と今」は四月十一日から二十三日まで、第三弾「商家の暮らし～明治・大正～」は六月二十七日から七月九日まで開かれる。

会期中の展示時間は午前十時から午後六時まで。入場無料。

展示会場の「くまがや館」＝熊谷市筑波一丁目

くまがや館　熊谷市筑波1の29　☎048・521・4625　開館／午前10時～午後6時、会期中無休

第3弾「商家の暮らし」～明治・大正

百人一首や古文書、浮世絵

ペリーの黒船来航から五年たった安政五（一八五八）年四月二十三日、大老、井伊直弼は豪腕を発揮し「安政の大獄」といわれた大弾圧を行い、ついには桜田門外の変で暗殺される。徳川幕府の力は弱まり、薩摩藩、長州藩の台頭、新撰組や坂本竜馬の活躍、明治維新と、大きく激動する時代に突入していく。

初代小源治の妻、なつは小源治の死去から九年後の慶応三（一八六七）年四月に亡くなった。この年の暮れ、十二月二十七日に徳川十五代将軍慶喜が大政奉還、江戸幕府は終わりを告げ、明治時代が幕を開ける。

六月下旬からの「歴史展」第三弾は、明治・大正時代の商家の暮らしがテーマだ。

明治十七年、筑波町一丁目に店と自宅を移した大和屋は、その後、自宅を移転、昭和五十一年には問屋町に完成した新本社へ移転する。

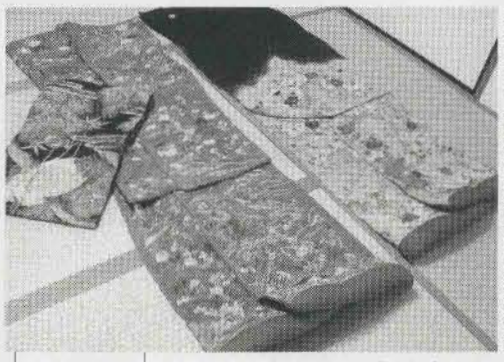
自宅の蔵に大切に保存されていた明治・大正時代の品々の中から、百人一首やカルタ、古文書、地図、浮世絵などで、当時の商家の暮らしぶりを今に伝える展示を予定している。

くまがや館の高橋明代館長は「ぜひ気軽に見に来て欲しい。第三弾の目玉はJR熊谷駅コンコースにもある錦絵の実物。熊谷で百八十四年という歴史、時代の雰囲気を感じてもらえたらうれしい」と話していた。

第1弾「雛まつりにちなんで」

姫君から拝領の雛飾りの籠

第一弾の展示品で一際目を引くのが、雛飾りの道具類だ。初代の孫にあたる二代目小源治の長女「こと」が、忍城主松平家のお姫様から頂いたという逸品だ。



初代の孫娘「こと」さんの着物

初代の孫娘「こと」は安政三（一八五六）年、十三歳で忍藩松平家の奥女中として忍城に奉公にあがった。松平家の姫君のお付きとして三年間勤めたが、お姫様に非常に気に入られ、三月雛飾りのお籠を拝領したという。

ことは黒田家の養子となった源吉（三代目小源治）と結婚した。三代目の死去後は後見人の選任等を任され、「御隠居様」として采配をふるい、九十三歳の長寿を全うした。

晩年、奉公した当時の用の脇差を帯刀、殿様からのお召しがあった場合は、絆（かみしも）を着用して御召刀の脇差を帯刀したという。

・羽織・袴を着用、礼装

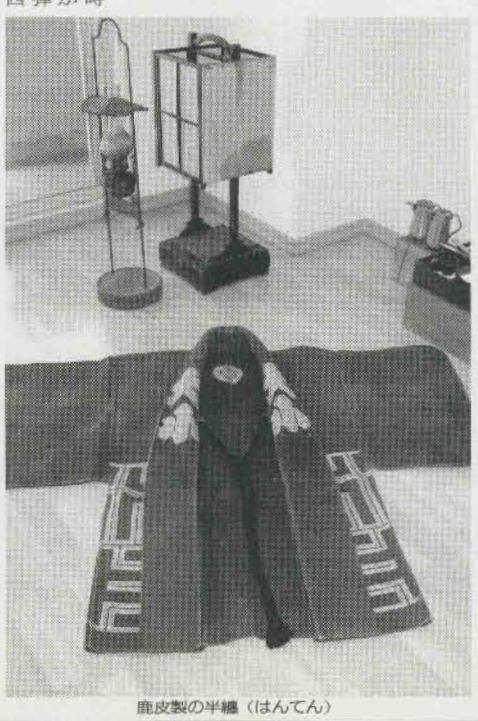
一代で忍藩の御用商人となった初代小源治は、お城への出入商人として帯刀を許されていた。忍城へ出向くときは紋付

第2弾「材木屋の昔と今」

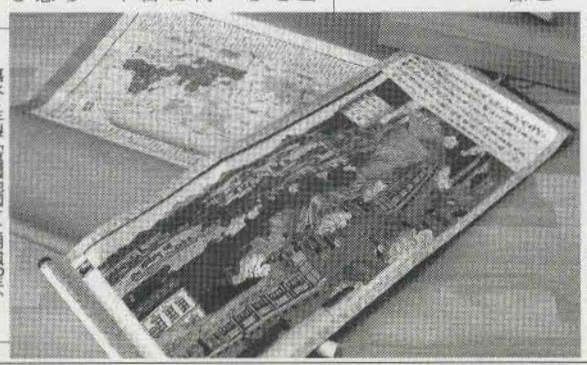
祝儀に使った鹿革の半纏

四月十一日から始まる第二弾のテーマは「材木屋の昔と今」。黒田家が所有する材木商人の道具類を中心に、写真や古文書を展示する。県立文書館に寄託していたため、新たに手続きをとって借り出した古文書も並ぶ。

中でも珍しいのは薄茶色の厚い半纏（はんてん）で、布製ではなく鹿皮製だ。出入りの鳶頭、大工の棟梁などが祝儀の際に使用したもので、当時の材木商の勢いを物語っている。



鹿皮製の半纏（はんてん）



嘉永3年製「萬國地図」と明治16年、上野熊谷間の「汽車開通当時の錦絵」